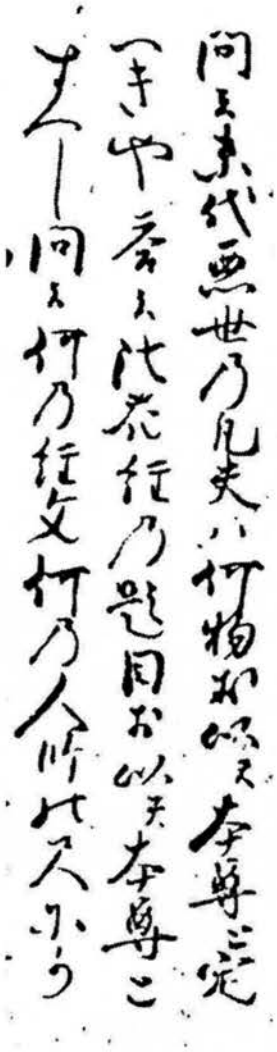
今月の御聖訓



《日興上人筆》

問フテ云ク、末代悪世の凡夫は、何物を以て本尊と定ムべきや。答ヘテ云ク、法華経の題目を以て本尊とすべし。【問フテ云ク、何レの経文、何レの人師の釈にか】

【本尊問答抄　全集三六五頁】

目　　次

今月の御聖訓

巻頭言 …… 菅野憲道　1

「末法適時の御本尊とは(その１)」 …… 菅野憲道　2

御書と日興上人〔186〕 …… 松田銘道　8

「興風談所の研究成果(十七)」 …… 菅原関道　10

【山行記】「年末・年始の金剛登山」 …… 森　秀之　14

読書案内『100歳の100の知恵』 …… 松田銘道　16

…… 17

節分会住職挨拶 …… 20

三月の行事　弥生詠草　恵日俳壇　訃報

表紙写真　撮影：菅野和幸氏　　題字：立正安国論より拝写

巻頭言

偶感

菅野憲道

人類の歴史でいまほど文明が開けたことはなく、人類の英智を寄せ集めたテクノロジーの恩恵によって、人々の生活は快適で便利で安全な時代が到来したかと思いきや、新型コロナウイルスによるパンデミクスに、人類はほとんど有効な対抗策も無いまま、ウイルスまかせのような数年が続いている。これがさらに変化して、致死率が高いものや感染力が強いものなどになったら、その時は人類滅亡の危機も強ちフィクションとばかりはいえなくなる。

そうこうしているうち思いもよらなかった戦争が始まる。誰もが予想していなかったというが、立正安国論には謗国に三災七難が競い起こる事は明示されているし、いまの日本が戦争に巻き込まれないという保証は何もない。悲惨な戦場の映像に毎日のように接するようになり、一年が過ぎても一向に砲火が収まる気配はない。収まるどころかますます激化している。他への飛び火も心配だが、世界が狭くなった分だけその影響も想定外となろう。しかしそれより人々が野蛮で悲惨な愚行に慣らされ、やがて無関心、無感覚になることの法を案ずる。

それは法華経に「常に地獄に処すること園観に遊ぶが如く、余の悪道に在ること己が舎宅の如し」と説かれているように、暴力が常態化し、狂気と精神的荒廃が蔓延ってしまったら、宣戦布告など無くとも、いつの間にか気づかないうちにこの世は戦場となっているのだろう。　北のミサイル発射も年季が入ってきたが、いまや驚きの反応も薄く、またいつもの虚勢に過ぎないというような受け止め方がひろがって油断した時こそ一番危ないのではなかろうか。人間の賢さと愚かさを同時に見せつけられているような昨今である。

お講講話（要旨）

拝読御書　「本尊問答抄」（全集三六五頁）

末法適時の御本尊とは（その一）

菅野憲道

《一番尊く大切なもの》

信心修行の基本的な形と心は、大聖人様が顕されたこの南無妙法蓮華経の御本尊に向かって余事余念なく、一心にお題目を唱え、また行住座臥、身口意の三業に妙法蓮華経を受持することで、任運に、日蓮大聖人が当身の大事とされた当体蓮華を証得することにあります。

そこで「本尊」の語意を調べますと「本有尊形」「本来尊崇」「根本尊敬」等の例が見られます。要は一切衆生にとって最も大切な尊いものを指しているものと思われます。

それでは自分にとって、また一切衆生にとっても、一番大切で尊いものは何かと尋ね、これを突き詰めていけば、一般の人は、福（財福）＜禄（地位）＜寿（健康）というようなことが思い当たるのでは無いかと思います。しかし仏教を学んで諸行無常を知る人はそこから一歩進んで、それらの宝はいずれ失せてしまうもので、本当の宝ではなく、心こそ大切だと信じております。しかも法華経では無上宝珠が説かれ、一切衆生は本来悉く常住仏性を有する旨が説かれておりますから、そのことに気づき自覚させる妙法こそ最も大切なものという信仰になっていきます。

しかし最も尊く大切で根本的なものといっても、自分と無関係で他所にあるものでは意味がありません。そうかといって自分一人だけの固有のものでもでもありません。そこで云えることは、一念三千とか一即一切というような普遍性と、久遠即末法というような永遠性、もしくは超越性をもったものと予想されるのです。真理とはそういう性質のものかと思います。

したがって、そのような信仰の内容（法体）を一定の儀礼（化儀）で象徴したり、目に見える形で表現したりしますが、一水四見の譬えや雖近而不見の経説のように、同じ御本尊でもその人の時々の心によって全く違った見方になりますから、正しい信心なくしてはその本尊の意義も見失うのであります。また、もし現実世界の形式としての本尊論（化儀）に終始するなら、信仰世界とは異なる相対的な見方となって、普遍性や永遠を感得する心の世界は閉ざされてしまいます。人生にとって最も尊く大事なものを感得することは宗祖御図顕の御本尊を無二

に信ずる一念信の他にはありません。このことを念頭に置いて話を進めたいと思います。

《事一念三千の本尊》

ところで御本尊の奉安形式について、日蓮門下がいくつにも分派して、その本尊も異なっている状態で、日蓮宗などは、実態として未だに御本尊が統一されず、釈尊一体仏、一尊四士、二尊四士、妙法曼荼羅、その他、主として釈尊像を中心に諸尊の木像を所狭しと並べております。そのうえ、中山の荒行をはじめとする呪法祈祷が盛んで、その修法においては、神道系か真言系か、中国系や民俗信仰に由来するものまで様々で、雑乱勧請といって魑魅魍魎の類いまで本尊とするような迷信の類いであります。御本尊さえ雑多で定まらない状態では、信心修行も定まらず、木剣振りや易断のような不純なものまで交えているようです。

日蓮宗でも教学を学んでいるはづで、「観心本尊抄」の冒頭に一念三千の出処をあげて、末法相応の御本尊は事一念三千の南無妙法蓮華経であることは分かるはずなのです。であれば、日蓮大聖人がお認めになった五字七字の曼荼羅御本尊以外に、事一念三千の法体を顕すことは不可能でしょう。

国宝・細字法華経

本宗においては、宗祖・開山以来一貫して十界互具・一念三千の曼荼羅本尊を御本尊として信心修行して来た伝統があります。もちろんその御安置する化儀、形式の上においては、その御本尊と大聖人の御影座像を御安置（人法一箇を表す）したり、大聖人と日興上人のお姿を両脇に御安置（三宝一体を表す）する形がありますが、これみな法華経の行者日蓮大聖人所証の一念三千を顕すもので、一幅の御本尊と同じ意義で、在家でもお寺でも、この十界互具・**一念三千**の妙法蓮華経の御本尊を祀って信心修行の対象とするのです。

「観心本尊抄」の末文では、

「一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起こし、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたまふ」（観心本尊抄）

と仰せられて図顕されたこの御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えるとき、妙法蓮華経の仏力法力と、受持する行者の信力行力によって境智冥合し、、

「南無妙法蓮華経と唱ふる人は煩悩・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と転じて、三観・三諦即一心に顕はれ、其の人の所住の処は常寂光土なり。」（当体義抄）

と仰せの如く、「如我等無為」の本仏の誓願とあいまって我が身も妙法蓮華経の当体、「事一念三千即自受用身」と証得されるのです。

「三観三諦即一心に顕はれ」とは、妙法蓮華経の受持によって、日常生活の中で次々とおこる感受、認識、判断、選択等の己心中の作用について一念三千という法界を空仮中の三観三諦をもって適切かつ自在に用いて、必要な対応を採ります。

人は時々刻々に種々の縁に触れ種々の心理が反応し、種々の選択枝を即時に判断しているのですが、そこで煩悩で判断するときは四悪道に向かい、自身に迷えば悪縁に引かれます。もし妙法蓮華経を一心に受持するなら仏知見によって最良の状態がもたらされます。

要するに、人間は生まれた時から煩悩……思想、感情、欲望などが、この身体の主として君臨し、無自覚のままに煩悩に縛られ、煩悩に使われているのです。人間が成長しますと、社会的規範や道徳などで多少はコントロールできますが、根本的には偏執から逃れられないのです。

「煩悩・業・苦の三道を転じて法身・般若・解脱と転ずる」とは、一心に妙法蓮華経と信じて唱えるとき我の執着から解放され、本来の清浄心に転じ、自然に仏智が具わるとの意味です。

ゾロアスター教の遺跡・聖火台跡（イラン）

《時節相応の本尊》

次に大聖人が、なぜ新しい宗旨を立てられたの考えて見たいと思います。

西暦五三八年日本に仏教が伝来して以来、法華経が諸経の中での最勝、最尊のお経であることは誰もが認めることでした。奈良時代、平安時代を通じて法華経を中心に仏教が社会にも広く受容されてきたのですが、平安初期あたりからおかしくなってきました。その理由の一つには、空海や天台の慈覚・智証等が中国から真言密教をさかんに伝来してきたのですが、これは古代イランのゾロアスター教に由来する護摩を焚きをはじめマントラ、印相など、仏教とは異なった加持祈祷を専らとする神秘主義であり、呪術を用いた鎮護国家の宗教はむしろ亡国の災いを招くものだったのです。

さらにその後、歳月を経て院政期には念仏が大流行します。頻発する現世の災難や苦しみから逃れるために、この世とは無縁の西方十万億土の弥陀の本願だけを根拠に厭離穢土極楽往生を説く浄土教が弘まります。それも法然・親鸞の段階からは一向専修といって法華経をはじめ諸経を抛ち、諸縁を捨てて念仏を唱えるというものです。これは厭世思想の一種で、現実社会の改革や努力を放棄して悪を増長させることにもなり。

また鎌倉期に南宋から渡来した禅僧によって臨済禅がもたらされ、中国の文物輸入によって権力者に庇護されたが、「超仏越祖」、「殺仏殺祖」という禅語が示すように増上慢に陥って

「謂己均仏」（己れが仏に均しと謂う）という悪弊と禅問答のように苦節した韜晦があります。

その頃さらに末法思想が起こります。釈尊入滅後二千年経つと仏教は衰退し、教理としては伝えられても、実践する人もいなければ、法華経の真精神を証得する人もなく、濁悪の世が到来すると考えられていたのです。平安後期は多くの学僧は末法思想を克服して仏教再生の道を真剣に探し求めたのです。後に鎌倉新仏教といわれる新興仏教は、末法思想を契機に社会がいっそう混迷する中から生まれたものといえます。

日蓮大聖人は、法華経を中心とした正統な教えに戻らなければならないと訴え、念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊の四箇の格言を掲げられたのです。

それは各宗が自派の優越性を主張することが、その結果として最も優れた法華経を貶める結果をもたらすからです。

例えば浄土教系の教えでは「法華経は難解で今の人々の機根には合わない」「法華経は立派な人がすることで、自分達のような愚かで欲深い人間に無理なこと」という屈折した理由で法華経を無用視します。念仏以外の諸行をすべて拒否していながら、一方で法華経の久遠実成の法門を剽窃して久遠実成の阿弥陀如来などと作り話をするのですから、これでは念仏者無間地獄ということになります。

密教系の天台・真言にしても大日経・金剛頂経・蘇悉地経の真言三部経によって法身仏の大日如来を本尊と仰ぐのですが、ここでも善無畏三蔵が法華経の一念三千の法門を盗み取って理同事勝という経文にはない法門を立てるのです。

閉ざしてしまったことから、衆生の成仏の道を塞ぐ、仏教の一番の根本精神を失わせてしまうことだと、四箇の格言を強くいわれたのです。

《互具ということ》

そういうところから日蓮門下は教義論争の多い宗風となりますが、御本尊とはいかなるものかについて、滅後は御書・法華経・天台三大部などを依拠として、教相の議論が盛んに交わされます。ところが本尊論争は教相観心、文上文底、大綱網目、同名異体・異体同名、五重相対など、解釈が複雑多岐にわたり容易に決着がつきません。例えば教主釈尊の解釈などです。

普通の感覚でいえば法華経をはじめ仏教全体は釈尊の説かれたものという理解ですから、仏教は教主釈尊を本尊とすることが常識と考え、そういう目で御書を見ると、御書の中でも度々「教主釈尊」を本尊とするような文辞も出てくるのです。

「観心本尊抄」には、

「其の本尊の為体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士上行等の四菩薩、文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如し」（全集九四七頁）

とあって、釈尊が法華経のいよいよその肝要を説法される時、大地が割れて宝塔が涌現してきて、はるか虚空に巨大な宝塔がそびえて、その宝塔の中に釈尊と多宝如来が並んで座る形で法華経寿量品の説法が始まるのです。その姿だけを見ると釈尊が

教主で、そこから釈迦牟尼仏、あるいは釈迦・多宝が本尊であるような解釈も生まれてくるのです。

また、「報恩抄」には、

「求めて云く、其の形貌如何。答へて云く、一つには、日本乃至一閻浮提一同に、本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦・多宝・外の諸仏並びに上行等の四菩薩脇士となるべし」（全集三二八頁）

と書いてありますので、ここでも釈尊が本尊のようにも捉えられなくもありません。

しかし、あくまでも「観心本尊抄」には、

「其の本尊の為体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華経の左右に……」

（同）

とあって、明らかに塔中の妙法蓮華経が御本尊で、その左右＝両脇に釈迦牟尼仏や多宝仏が並んで座って寿量品が説かれたのです。

また、「本尊問答抄」の冒頭には、

「末代悪世の凡夫は、何物を以て本尊と定むべきや。答へて云く、法華経の題目を以て本尊とすべし」（全集三六五頁）

と明確に書かれていて、これは後段に

「問ふて云く、然らば、汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして、法華経の題目を本尊とするや。答ふ、上に挙ぐるところの経釈を見給へ。私の義にはあらず。」

と記され、釈尊（およびその仏像）を本尊としないことを明瞭に語られ、南無妙法蓮華経こそが御本尊だということは揺るがす事ができないものです。

そういう目で本尊抄の文を見れば、妙法蓮華経が御本尊で、その左右に脇士として釈迦牟尼仏と多宝仏が証明を加えるという形になるのです。

さらに、釈迦多宝から始まって上行等の四菩薩、迹化の文殊弥勒等の菩薩、声聞、縁覚、天、人、それから地獄・餓鬼・畜生・修羅といった四悪道の代表に至るまで、十界互具の姿が妙法蓮華経の光明に照らされて衆生世間・国土世間の成仏という図式が、そこに示されているのです。

大聖人筆・「注法華経」

ですから、一つには、釈尊一仏だけ、或は多宝如来との二仏並座だけが対境ではなく、十界互具、百界千如、一念三千の法界全体が御本尊の姿になるのです。

仏が仏の姿を表すのは当たり前のことで、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四悪趣の衆生までが、妙法蓮華経の功徳によって成仏することが九界即仏界の証明です。地獄の衆生が成仏できなければ、十界互具の妙法蓮華経とはいえません。十界各別では六道の衆生は永久に六道を流転するばかりです。ところが法華経は舎利弗の記別、竜女の成仏、提婆達多が記別が明かされ、初めて一切衆生の成仏が保証されたのです。

九界の衆生が妙法蓮華経に帰命して、妙法蓮華経の光明に照らされ、変毒為薬し境智冥合することによって成仏の姿を遂げ

るところに、御本尊の姿があるのです。応仏昇進の本果妙の釈尊の本尊では、九界に仏界を具することが表せないのです。

《六種の教主釈尊》

「本門の教主釈尊を本尊とすべし」と記されて、その本尊の脇士が釈尊と多宝があることは、教主釈尊といっても様々な教主釈尊がおられることになります。これを名同体異といって宗祖の一代五時継図などをもとに日寛師は「六巻抄」などで教主釈尊に次の六種をあげております。。

劣応身（蔵教の教主）・勝応身（通教の教主）・報身（別教の教主）・法身（迹門の教主）・久遠本果の自受用身（在世本門の教主）・久遠元初の自受用報身（寿量文底本因妙の教主）……このように種々の説法教化には種々の教主釈尊があって、ここでは久遠元初の妙法蓮華経の仏（人即法本尊）を、教主釈尊と表現しているというものです。

したがって「報恩抄」に「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とあるから「釈迦牟尼如来」を本尊とするなどと安易に解釈しては日蓮大聖人の御意に大きく違う事になります。それはこの御本尊は「仏滅後二千二百三十余年未曽有の大曼荼羅也」と記され、末法に入って初めて出現した未曽有の大御本尊だといって印可を加えられているのです。「前代未聞」「惑耳驚心」等とも表現されておられるように、誰もが考えもしなかった画期的な五字七字の南無妙法蓮華経の御本尊なのです。

次に大聖人御図顕の曼荼羅本尊は法華経の行者日蓮の当体であり、事一念三千即自受用身とは南無妙法蓮華経日蓮と認められた法即人・人法一体の御本尊であり、色相荘厳の仏像とは違うこと。これは日興上人の高弟三位日順師の「誓文」に、

「仏滅後二千二百三十余年の間、一閻浮提の内に未曽有の大漫荼羅所在の釈迦・多宝・十方三世の諸仏、上行・無辺行・普賢・文殊等の諸薩埵、身子・目連等の諸聖、梵・帝・日月・四天・竜王等、刹女・番神等、天照・八幡等、正像の四依の竜樹・天親・天台・伝教等、別して本尊総体の日蓮聖人」

とあり、「五人所破抄」や「原殿御消息」等の記録とも一致して、日興門流の本尊観が当初から一幅の大曼荼羅即日蓮大聖人の御当体で一貫していることを証しております。他門流のように後世に学僧が頭で作り上げた教相立ちの本尊論とは全く異なって、大聖人から師伝してきた観心の本尊なのです。

また、大聖人御真筆の本尊は一二六幅に六，七幅の未公開のものが現存しております。ところが大聖人の造立された釈尊像は一体もありません。一尊四士にせよ二尊四士にせよ、一体仏にせよ、大聖人自ら造立されなかったという事実こそ大聖人のご本意を雄弁に物語っているのです。

すなわち造像正意ならば、大聖人は末法出現の最大の目的である末法適時の御本尊開顕という大業を果たされなかったことになってしまうからです。「富士一跡門徒存知事」には、

「日興云く、聖人御立の法門においては全く絵像木像の仏菩薩を以て本尊となさず。ただ御書の意に任せ妙法蓮華経の五字を以て本尊となすべし。即ち自筆の本尊是れなり。」

と厳誡なされており、その上わざとご自筆で「日興弟子分本尊目録」を作成されている御意を知るべきでしょう。（つづく）

【御書と日興上人（一八六）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一二〇）

松田銘道

（連載一七六）で紹介した「一大秘法」や「三大秘法」の項目に、

①弘安元年（一二七八）九月の『本尊問答抄』の「法華経の題目を以て本尊とすべし」とのご文。

②弘安年間に入って急増する「法華経の御宝前に申し上げる」という表現。

③弘安元年の四月から六月にかけて見られる宗祖花押における𑖨（バン）字花押から𑖨（ボロン）字花押への変化。

以上のような文献を提示しています。

このことから、「建治から弘安の境目頃を契機として、宗祖の本尊意識が釈尊本尊より曼荼羅本尊へと変化した」とする見解に、日蓮宗側で注視したのが都守基一氏（日蓮仏教研究所主任）です。氏は、「講演要旨『三大秘法について』」（『日蓮仏教研究第四号』平成二十二年三月三十一日発行）との論文に、次のように述べています。

まず、『観心本尊抄』の本尊観の説示については、

「『観心本尊抄』では、末法に始めて出現する『本門の本尊』の相貌について、『塔中の妙法翌華経』を中心とする八品の様相と、本化四菩薩を脇士とする『寿量の仏』との両様が示されていた。これをもとに造立されたのか、大曼荼羅と一尊四士である。前者はいわゆる法本尊、後者は人本尊（仏本尊）で、いずれを正意とするかの議論か古来より喧しいか、聖人の中では矛盾なく並存していたに違いない。」

と、『システム辞書』（「本尊」の項目の⑥の解説）と同じく、二つの本尊観が「聖人の中では矛盾なく並存していた」との見解を示しています。

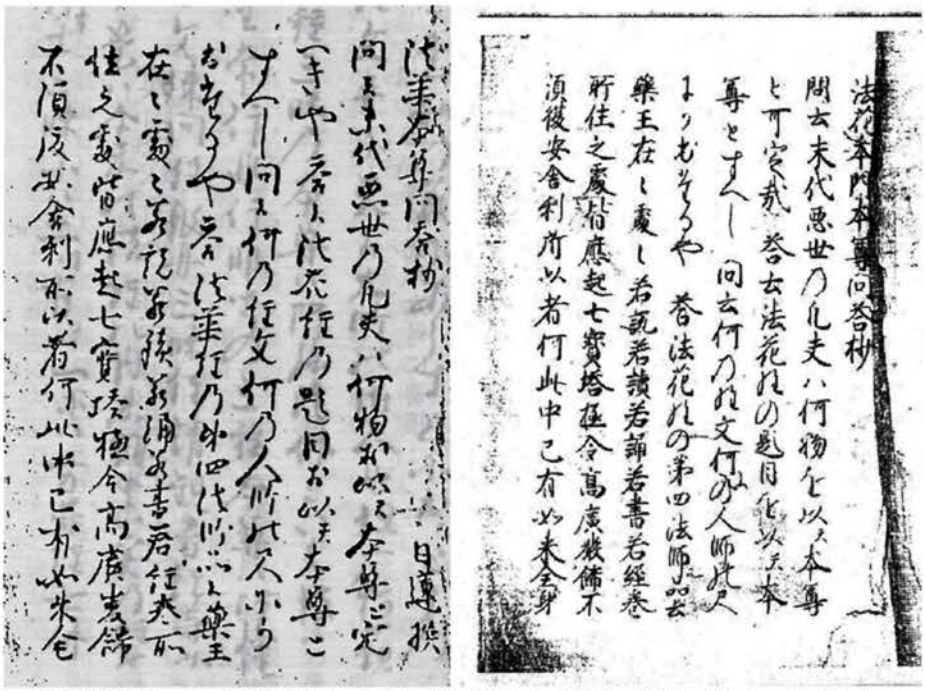
しかし、弘安元年（一二七八）年九月の『本尊問答抄』の「法華経の題目を以て本尊とすべし云云」のご文に関しては、「法華経の教主釈迦を本尊とせず、法華経の題目を本尊とするという主張は、

前回は『システム辞書』の「本尊」の項目の、「⑥、宗祖滅後、日蓮門下では（「報恩抄」）を人本尊、（「本尊問答抄」）を法本尊と見なしてきたが、どちらが宗祖の本意であるのか、また、両本尊の関連については明確な指針が示せていないこと」について検証してきました。

今回は、「⑦建治から弘安の境目頃を契機として、宗祖の本尊意識が釈尊本尊より曼荼羅本尊へと変化したと見ることも可能」との見解について見ていきます。

⑦の見解は、従前には提示されていない本尊観ですが、「本尊」の項目では、「釈尊本尊より曼荼羅本尊へと変化したと見ることも可能」との見解を示しているだけで、具体的な文献等は何も示していません。それについては、すでに本稿

『報恩抄』の「本門の教主釈尊をもって本尊とすべし」という主張と一見矛盾する。もし本尊が釈尊でなく題目であるとすると、本尊と題目が同じとなって三法門の体系が崩れてしまう。」



『本尊問答抄』はご真蹟が伝わらず、㊧日興上人の写本（後半三分の一ほどを欠す。静岡県北山本門寺蔵）と㊨末紙に「正応三年（一二九〇）庚寅七月十五日書写之 日源」との識語がある、実相寺日源師（一二五八～一三一五）の写本（静岡県実相寺蔵）が伝わる。

との見解を示しています。

ここには、宗祖が「法華経の題目」＝「法本尊（＝曼荼羅）」と規定されたと解釈すれば、「本尊」＝「題目」となり、「三法門の体系」＝「三大秘法」の意義が失われる、との疑念を示しています。この疑念は、ひとえに近年の日蓮宗の解釈に起因しています。そのことについては、引き続き、

「優陀那日輝和尚『妙宗本尊略弁』は、この『本尊問答紗』の題目本尊は「対告衆の浄顕房の機根が未熟であるため、ただ権実相対の一辺を示して真言諸家の本尊を破し、通途の天台法華の法相を述べたに過ぎない」

としている（『充治園全集』三巻三八七頁）。近代の先師の多くもこの一節の会通を試みているが、おおむね輝師の意見と同様である。しかしこれとは反対に、「本尊問答紗』の法本尊・題目本尊こそ宗祖の正意であり、ここに弘安期の法義的新展開があるとする立場もある（山上弘道「日連大聖人の思想（六）」『興風』十六号、同「日蓮大聖人曼荼羅本尊の相貌変化と法義的意義について」『興風』十七号）。」

と述べています。ここには、

❶日蓮宗では、日輝師（一八〇〇～五九）が『本尊問答抄』の「法本尊」について、「通途の天台法華の法相を述べたに過ぎない」とする解釈を、「近代の先師の多く」が継承してきた。

❷「それとは反対に、『本尊問答抄』の法本尊・題目本尊こそ宗祖の正意であり、ここに 弘安期の法義的新展開があるとする立場もある」。

このように、❶の日蓮宗の見解にもとづく疑念と知れますが、都守氏は❶とは異なる見解を示した、❷の山上氏の研鑽成果にAも注視しています。（続く）

興風談所の研究成果（十七）

興風談所　菅原関道

『日蓮仏教研究』六号に寄稿

平成二十六年（二〇一四）三月三十一日刊の『日蓮仏教研究』六号に山上弘道「身延文庫『延山録外』所収『唐鏡要文』について」、菅原関道「重須本門寺蔵『頼基陳状』日澄本の日付等について―間宮氏への回答―」が掲載された。

『延山録外』は身延久遠寺二十六世日暹（一五八六～一六四八）が同寺に伝来した宗祖の御書や草案、各種写本・抄録・要文等を模写したもので、その中に「唐鏡要文」がある。『唐鏡』とは藤原茂範（一二〇四～一二九四）が建長五年（一二五三）から文永元年（一二六四）まで宗尊親王の侍読として鎌倉へ祗候した際の著作と推定されている。山上は「唐鏡要文」を影印で紹介して翻刻し、古典文庫『唐鏡』と校定した上で、①宗祖自筆「唐鏡要文」は明治八年の久遠寺大火で消失したがこれを模写した日暹本の価値は高い②国文学者における『唐鏡』研究の概要③「唐鏡要文」は文永五年～九年の間の筆写と推定できるので要文ながら『唐鏡』の最古写本である④「唐鏡要文」によって得られる新知見、等々について述べる。

菅原は『興風』十五号所収論文にて『頼基陳状』二種写本の内、未再治本写本とよばれるものが日澄筆、再治本写本とよばれるものが日興筆であると明らかにし、日澄本は主君江馬氏へ上呈された本の写し、日興本はその後に宗祖が上行自覚を書き入れて再治した本の写しと推定した。つまり『頼基陳状』の成立順は日澄本本文（上呈本）→日興本本文（再治本）である。江馬光時を日澄本に「君」、日興本に「故君」と記すのも、宗祖が上呈本を執筆した時に健在だった光時が、再治本の執筆時に死去していたことに対応した記述である。ただし日興本の日付は建治三年六月二十五日、日澄本の日付は翌年の弘安元年四月五日であり、これが著作日ならば成立順は逆転する。しかし日澄本の日付は日澄の書写日であり、日澄が日付を本文とかなり離して書いていることからもそれがわかる。これに異を唱えたのが創価大学の前川健一氏で、書写日ならばその旨を記すのが常であるから日澄本のは著作日とみるべきで、成立順は日興本本文→日澄本本文であろうと批判した。菅原は平成二十三年の御書システムコラムで反論したが、身延山大学の間宮啓壬氏は菅原は前川批判に真摯に回答していないとして『日蓮仏教研究』五号所収の論文で回答を求めてきた。しかし間宮氏は菅原の所見をよく理解しておらず、菅原は再び丁寧な説明を施す。

『興風』二十六号

『興風』二十六号は平成二十六年十二月十三日刊で、寺尾英智「諸門流先師の曼荼羅本尊について」、佐藤博信「安房妙本

寺門流にみる上人権の実態―特に曼荼羅本尊・上人号・日文字などをめぐって―」、石附敏幸「日蓮遺文と承久の乱―「還著於本人」思想の考察を中心に―」、山上弘道「『曾谷殿御返事』（焼米抄）と『本尊問答抄』の法義的位置づけ」、山上弘道「間宮啓壬氏の論攷「再度、日蓮の地涌・上行自覚を論ず―山上氏の批判をうけて―」への感想」、大黒喜道「「開目抄」に説かれる三世の成仏道について―竜口法難から佐渡流罪期にかけての重層的な構造の中で考える―」、池田令道「身延文庫蔵『録外御書』に関する考察」、坂井法曄「日興の生涯と思想（一）」、坂井法曄「大石寺東坊地相論と宗史雑感―榎木境道氏の批判を読んで―」という内容で、巻末に活動報告、聖教調査余録を付す。

昨年六月の定例勉強会では立正大学教授の寺尾英智氏をお招きして講義をいただいた。冒頭の「諸門流先師の曼荼羅本尊について」はその講義録である。現在、宗祖の曼荼羅本尊は立正安国会の『御本尊集』改訂増補版にて一二七点が確認できる。揮毫（きごう）された時期で分けると、文永年間二七点、建治年間二二点、弘安年間七八点。その筆法や相貌はじょじょに変化するが、各門流の諸師がどのように受け継いでいったかという問題は興味深く、氏はプロジェクターを活用して、①直弟子の曼荼羅本尊②直弟子以降の曼荼羅本尊③近世への転換という観点から説明する。①では宗祖のひげ題目（光明点）は晩年になるにつれて長くなるが、直弟子がそのまま引き写して揮毫しているわけではなく、右側の不動明王、左側の愛染明王の筆法も諸師で異なる。また宗祖をどのように曼荼羅に記すか、その位置付けも各門流で異なり、書写型と勧請（かんじょう）型に大別できる。書写型は日興門流に見られる「日蓮在御判」と記すもので、宗祖が揮毫された曼荼羅を書写する形式。勧請型は宗祖を天台大師や伝教大師と同列にして「南無日蓮聖人」「南無法主聖人」と勧請し、題目の直下に自分の署名と花押を記す形式。②では特異な題目として日像の「なみゆり題目」を紹介する。宗祖のひげ題目と違って斜め下ではなく、上方に跳ね上がっていて、この筆法は京都四条門流以外では使われない。宗祖の位置付けに関しては書写型・勧請型・中間型があり、門流や時期により異なる。中間型では題目の直下に大きく「南無日蓮聖人」と書くが「在御判」を記さない。目をひくのは、勧請型に属する四条門流の妙顕寺二祖大覚妙実（一二六九～一三六四）のそれである。延文二年（一三五七）夏の旱魃（かんばつ）に際して妙実に祈雨の勅命が下り、その後宗祖に大菩薩号、日朗と妙顕寺初祖の日像に菩薩号が贈官され、妙実の延文三年二月二十三日付の曼荼羅に初めて「日蓮大菩薩」「日朗菩薩」「日像菩薩」と勧請される。先師の位置付けでは勧請型の日朗門流・中山門流、相承型の日興門流・日什門流を紹介し、それぞれに己れこそ正統という法系意識が窺えるという。③では江戸時代の京都本満寺十二世日重・十三世日乾・十四世日遠が不受不施問題の末、それぞれ身延久遠寺二十世から二十二世となり、他寺の住持にも就くが、どの住持の立場で記した曼荼羅かで先師の勧請を異にする特殊な事例がある。またこの三師には宗祖を日蓮大菩薩と記す事例があり、四条門流のそれが他門にも受容された。近世の特徴として、署名に僧都や僧正などの僧位・僧官を書き添える事例、生存中の先師を勧請する事例も見られるという。各地寺院の宗宝調査に長年携（たずさ）わってこら

れた寺尾氏ならではの広範な知見・知識に基く講義であった。

佐藤氏（千葉大学教授）は日郷門流の本寺妙本寺が住持の「上人権」として、曼荼羅本尊・日号・上人号・阿闍梨号などの授与・任免権をどのように創成したかを検討して、①「上人権」は日郷当初から妙本寺住持の専権でなかったが、専権を主張するようになる背景に門流内の身分秩序と経済危機が存在した。②その転機となったのは門流本末・僧檀の主要な担い手たる有力有徳人が零落し、「家」中心の世俗的商職人が新たに登場したことにある。③供養する主体の変化にともない諸種の授与・任免の客体が変化して門流経済の変化をもたらした。④それへの対応の一形態として日是問題が起きた。⑤それによって崩壊の危機に瀕した本寺中心の身分秩序と門流経済の再建のため「上人権」が主張されたこと等を論ずる。

石附氏（開成高等学校教諭）は宗祖の承久調伏と「還著於本人」思想の言説について、これを発し始める契機が平頼綱との会見にあったとし、『真言秘法由事御書』（別称「真言宗行調伏秘法而還著於本人之事」御書システム№17450～17505・全集1353～1355）はその会見の際に撰述された勘文であること、背景には蒙古調伏に沸き立つ仏教界の現状に強い危機感を感じて祈祷を即座に中止させねばならないという切迫した状況があったこと、その言説は宗祖が叡山遊学時に吸収したもので、特に叡山での師俊範から継受した可能性が高いこと等を述べる。一点だけ感想をいえば、氏は「修養・修学はほどんど怠って秘密事相の伝授・習得に専念する天台座主は真言師の典型」として宗祖の台密批判の理由とするが、『法華〈別帖〉』『蘇悉地経問答』等を撰述する天台座主慈円（一一五五～一二二五）のような修養・修学を備える真言師もその理由に入るのではないか。『滝泉寺大衆日秀日弁等陳状案』に「この法を修するの仁は弱くしてこれを行へば必ず身を滅し、強くしてこれを持てば定めて主を失ふなり」（№27487・全集851）というところの主を失うは、後鳥羽院の護持僧であった慈円にも当てはまるのではないか。

『曾谷殿御返事』真蹟断片

山上の「『曾谷殿御返事』（焼米抄）と『本尊問答抄』の法義的位置づけ」では、図版に示した『曾谷殿御返事』の真蹟断片を「米はすくなしとをぼし□し候へとん寿命をつく物にて候。命を□」（№27234・全集1059）と読み、従来の読みを修正する。また同書は弘安元年八月十七日状であり、下種益たる妙法が「五味主」であること、『曾谷殿御返事』と『本尊問答抄』の共通性と独自性、弘安元年における法義展開等について述べる。

山上の「間宮啓壬氏の論攷「再度、日蓮の地涌・上行自覚を論ず―山上氏の批判をうけて―」への感想」は間宮氏の反論に対する再批判である。間宮氏は①上行自覚を「行為的自覚」と

「本体的自覚」に分けて宗祖には前者があったが後者はなかった②『頼基陳状』再治本(日興写本現存)の二箇所の上行自覚は四条金吾頼基の見解であり宗祖の見解ではないという。山上は①二つに分ける必要はなく、上行自覚がなかったならば、一大秘法の妙法は結要付属を受けて初めて弘通できるという原則に違うことになる②上呈本も再治本も宗祖が作成したのだからご自身の見解と異なる文章を入れるはずはないと批判する。

大黒は竜の口法難で成仏とも呼ぶべき特殊な宗教体験を得た宗祖は、転重軽受法門にもとづく「其罪畢已」(現世の強信により過去の罪を洗い流すという意味)を遂げたことで、師弟一緒に釈迦多宝の霊山浄土へ往詣できたとする。それは現世における即身成仏の姿でありながらも、死後に必ず霊山往詣できる約束手形を得たという意味では三世にわたる成仏道である。そして熱原法難の三烈士こそ三世成仏道の体現者であり、宗祖はその死を悼むとともに、憧憬の念を込めて彼らの仏道修行の姿に私の「出世の本懐」があると宣言した。現世における即身成仏という考え方は私たちにとって魅力的であるが、それだけでは増上慢を生む要因となりかねない。だから冷静にして謙虚な強信を貫くため、三世の成仏道を心に刻む必要があるという。

池田は身延久遠寺身延文庫蔵の日境本『録外御書』の現存八冊を考察する。通心院日境(一六〇一～五九)は久遠寺二十七世。日境本録外は通常の録外御書を蒐集・書写するのみならず、久遠寺に伝来した真蹟断簡を模写したり、久遠寺曾存の真蹟によって録外御書を校訂している。模写は小篇が多いが、他に写本の伝来するものがなく直ちに新加の御書となることや、真蹟遺文の復元という意味で実に貴重。『縮刷遺文』『定本遺文』に未収録の身延曾存真蹟の断簡や草案、要文等が散見されるので、今後の遺文編纂には日暹の『延山録外』同様欠かせない存在である。今回はその準備段階として日境本録外の構成や特徴を説明し、写真図版での紹介や翻刻・解説を行う。

坂井の「日興の生涯と思想(一)」は日興一代記の執筆準備として、これまでの日興研究史・讃仰史を網羅的につづり、出生・出自について小考する。今後の研究に使用する文献は十分な文献批判を行い、真の日興像に迫りたいと決意を述べる。

「聖教調査余録」では岡山県岡山市の妙教寺・幸福寺、山形県酒田市妙法寺、静岡県伊東市光栄寺、新潟県三条市本成寺の聖教調査を報告する。本成寺は法華宗陣門流の総本山である。

『興風叢書』〔17〕

『興風叢書』〔17〕は平成二十六年十二月十三日刊で、千葉県安房妙本寺貫首・鎌倉日誠上人のご高配を賜り、同寺所蔵の①『行忍抄』②『秘蔵要文』③『宝地房十同事等要文』の影印を掲載して翻刻し、解説を加える。三冊とも経論釈の要文集で、筆者の注記や文章がほとんどないため、法論や説教に活用する目的で作成されたのだろう。①は宗祖・日興・某者二人の都合四人の筆蹟がある。②にはわずか二行であるが宗祖の筆蹟が見え、日目や某者数人の筆蹟も見える。③はほとんどが日目筆で、残りの一割程度は某者数人の筆蹟である。頭注には要文の出典に加えて、『注法華経』と関連する要文に『定本注法華経』の巻数と番号を記した。翻刻・解説ともに菅原関道が担当した。

【山行記】

年末・年始の金剛登山

大阪地区　森　秀之

まずは、年末に金剛山、葛城山を周回する金葛（こんかつ）登山を、足慣らしにソロで歩いてきました。距離としては、十六キロメートル程度になります。

今回は、車ではなくて単車にて、三〇九号線・水越峠に向い、金剛山登山口のトイレに単車を止めて、青崩道にて金剛山山頂広場（国見城址）へ。このコースは金剛山へ尾根が繋がっているルートで登頂しました。このコースは、私個人としては、樹林帯を延々と歩くルートで、変わり映えしないなと思っていますが、夏場に歩くと涼しく歩けるコースです。

そのまま山頂広場から山頂小屋の横を通って、もみじ谷ルートで水越峠へ下るコースで下山しました。

急坂を慎重に足取りに気配って、走るように一気にダイヤモンドコースに合流しました。

そして、ガンドバコバ林道から、水越峠より葛城山へは最短ルートのダイヤモンドトレールの急登に取りかかります。連続する長い丸太階段の中途半端な高低差が気になりながらも歩を進めると、葛城山山頂へ到着しました。

雪の金剛山山頂にて（前列左から４人目が筆者）

山頂は、広く開放感があり、眺望も金剛山より良いのが、葛城山の良さかもしれません。

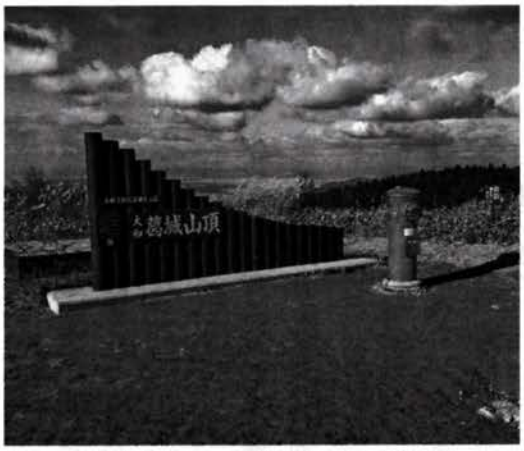
下山道は天狗谷ルートでしたが、このコースは山頂からゆったりしたコースが続き、途中から谷の雰囲気もあったり、またちょっとした鎖場もあるなど、楽しめるコースで、単車を止めているトイレに無事戻ってきました。

昨年末には、最強寒波が来ましたが、山頂に常設されている金剛山のライブカメラの映像で積雪状況がわかりますので、パソコンでチェックして、合間を縫って家内と予定が合う日を見つけ、急遽二回登ってきました。

今年は、家内と二人で、立山連峰の薬師岳の雄大さと、北アルプスの蝶ヶ岳に登って、槍ケ岳から連なる穂高連峰を見たいと思って、一応その計画しているので、そのためにと思って、少しアイゼンの練習もかねて登ってきました。

ルートについては、二回とも別々のルートで登頂しました。

一回目は、つつじお谷ルートで、途中に三つもある滝を眺めながらのコースです。特に、第三の滝では、氷瀑が見られることで有名なコースで、三つ目の滝を越えて登ると、尾根に上がる一般ルートとそのまま沢を詰めて、最終的には金剛山本道に繋がるバリエーションルートがありますが、今回は雪道なので、沢も逆に滑りにくくなり、チェーンスパイクをしているので沢をつめて、ロープを使って、橋の横から登って本道に合流し、山頂広場に向かって、ライブカメラ前に登頂し、写真撮影をして山頂小屋にて休憩をしました。



こちらは一転、誰もいない葛城山頂

このコースは、高度感のあるスロープで、滑落すると大けがでは済まない難所もあるところで、安易にアイゼンなしで登ると、大変危険です。

下山にこのルートを使うと、さらに難易度が上がるコースだと思いましたので、今回の下山は、王道の千早本道にて安全登山としました。

気温はマイナス七度で、風はさほどなかったのですが、さすがに少しでも留まっていると寒かったです。

金剛山の山頂には小屋がっって、いつも登ると小屋の中で軽く食事をとるのがルーティーンとなっているのですが、特にこの日のような寒い時は小屋の暖かさで救われました。

二人とも寒い時期は苦手で、外で食事をしているのを見ていると（それが醍醐味という方が多いのですが）、それこそ修行をしているように見えて、興ざめしてしまいました。

二回目は、もみじ谷ルートで、国道三〇九号線の水越峠林道ガンドバコバ登り口に駐車して、登山口より林道を歩いて、途中で金剛水が沸き出ているところで少し休憩し、もみじ谷コースに入ります。

最初は、なだらかな登りで、途中目安となる突堤が四つほどあります。途中、沢を何度も横切りますので、沢の岩稜を滑らないように、気をつけながらどんどん高度を稼ぎます。

登っている時には、その急登が気にならないのですが、振り返ると結構な急登だったことに気がつきます。

他の普通の登山道と大差ない急登なのですが、自分の体力の感覚と比較すると、いつも楽に感じるのがこの沢を詰める急登の歩きなので、私はどうしてもバリエーションルートで登るのが好きです。

しかし、このルートは山頂直前（今回は本流ルート）は、少し這いつくばって登るコースになっているので、さすがにそこの急登はきつかったです。

たどり着けば、葛城神社の裏にある、野鳥が集まる鳥の餌場に到着し、そのまま山頂広場のライブカメラ前、山頂小屋と、いつものルーティーン。

帰りは、細尾谷コース（金剛山三大急登）にて下山しました。

「人生百年の時代」と称されている。ここ五〇年ほど百歳以上の方が年々増え続けていて、昨年は全国で九万人を超えたことが報道されていた。

老後の生活に欠かせない年金でも、百歳を迎えるための対処方法などが話題にもなったりして、長生きも身近かな問題となってきている。

女性が活躍しにくい戦後間もない一五歳の時、「自分の足で立ちたい」と決意し仕事を始めた。その後、生活評論家、随筆家として活躍し続けてきた著者も、二〇一八年に百歳の仲間入りをした。

それまで数多くの本を著してきたが、九十歳を迎えてからの著者のタイトルが、興味深い。

『90歳。一人暮らしをたのしんで生きる』ではじまり、『91歳。今日を悔いなく幸せに』、『92歳。小さなしあわせを集めて生きる』、『93歳。ひとりごとでも声に出して』、『94歳。寄りかからず。前向きにおおらかに』、『95歳。今日をたのしく。もっと前向きに』、『96歳。今日を喜ぶ。一人をたのしむ』、『97歳。いくつからでも人生は考え方で変わります』、『98歳。心して「一人」を楽しく生きる』、『99歳、いくつになってもいまがいちばん幸せ』、と続いている。

そして、百歳を迎える直前には、『100歳まで生きる手抜き論 ようやくわかった長寿のコツ』と、百歳近くになってようやく「長寿のコツ」がわかったのだと。

著者が若い時から自分らしく、前向きに生きてきたかが、タイトルからも伝わってくる。実際、百歳を迎えての本書には、その「長寿のコツ」が、①「愚痴は言わない」②「世間体は考えずしたくないことはしない」③「心のつながりを大事に。義理のお付き合いはしない」④「人間関係は腹八分目。深入りし過ぎない」⑤「世の中の競争のほとんどがどうでもいいことだから人と自分を比べない」⑥「夫婦も他人。相手に多くを望まない」⑦「悪口や噂話にはなるべくかかわらない」⑧「相手を尊重し人のプライドを傷つけない」⑨「親しい間柄でも金銭の貸し借りはしない」⑩「人のやることに口出ししない」。

以上の「私のしないこと十訓」として示されている。

読書案内

松田銘道

吉沢久子著

『100歳の100の知恵』

中央公論新社

定価二四〇七円

恵日だより

節分会

二月三日（金）午後七時

豆をまかれるご住職（節分会）

一年の中で一番寒が極まると言われているこの日も、夕方に近づくにつれ次第に寒さが厳しくなりましたが、午後七時より恒例の節分会が奉修されました。

定刻の午後七時、出仕鈴が鳴り響く中、ご住職が出仕され、読経唱題が始まった節分会は、途中御宝前にお供えしていた福豆を、ご住職が「福は内」のかけ声と共に、御宝前、本堂内四方にまかれました。

引き続いて、読経が続く中、今年の干支卯年の年女にあたる津山兆子さんが、「福は内」、「福は内」のかけ声とともに、本堂内に豆がまかれました。

豆をまく年女の津山兆子さん（節分会）

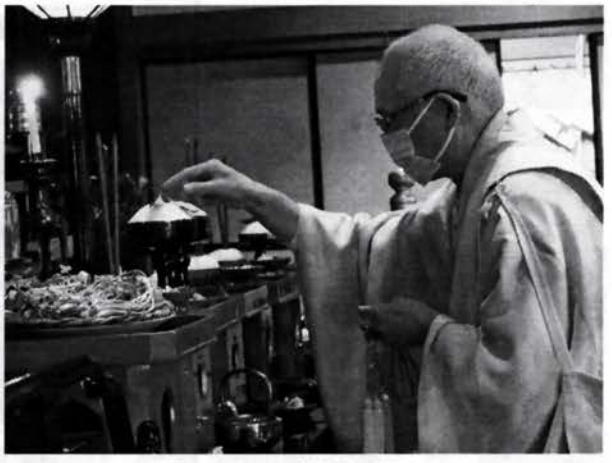
終了後、ご住職より節分会の意義から、太田入道殿から五十七歳の厄について問われたことへの御返事のお手紙で、厄を払うことについて記されたことを基に、正しい法華経の信仰に生きることの大切さについてのお話があり、午後八時前には散会となりました。

興師会

二月七日（火）午後一時

二月に入っても寒い日が続いていましたが、この日もそのまま朝から寒い一日となりましたが、午後一時より源立寺本堂において、御開山日興上人の御恩徳を御報恩謝徳申し上げる、興師会が奉修されました。

法要は、定刻に開始され、献膳、読経



献膳をされるご住職（興師会）

唱題と如法に進められ、法要終了後、ご住職より「原殿御返事」を通して日興上人一人が身延離山の経緯こそが、本師の正義、護法の一点に尽きる信仰精神であり、私たちが学ぶべき富士門流本来の信仰のあり方について、法話がありました。

お誕生会

二月十二日（日）午後一時

二月に入っても寒い日が続いていましたが、この日もそのまま朝から寒い一日となりましたが、午後一時より源立寺本堂において、御開山日興上人の御恩徳を御報恩謝徳申し上げる、興師会（こうしえ）が奉修されました。

法要は、定刻に開始され、献膳、読経唱題と如法に進められ、法要終了後、ご住職より「原殿御返事」を通して日興上人一人が身延離山の経緯こそが、本師の正義、護法の一点に尽きる信仰精神であり、私たちが学ぶべき富士門流本来の信仰のあり方について、法話がありました。

役員研修会

一月二十二日（日）午後一時

一月二十二日（日）、恒例の役員研修会が、幹事、婦人部役員、地区役員が、源立寺本堂に集って開催されました。

この日は、厳しい寒波が来たことから、通常の午前十時からの開催を、午後一時に変更して開催されましたが、参加した幹事・役員は、真剣な面持ちで研修に臨みました。

午後一時、ご御住職の導師による読経唱題の後、開会にあたり森講頭から、役員研修会を開く意義等について挨拶がありました。

引き続き、ご住職の講義では、「講中活性化のために」と題して、混迷する昨今にあって、法華経こそがそれを乗り越える指針となることを、配布されたレジュメを元に講義がありました。

その後、「我が信仰の原点」として、参加者の代表四人が、自らの体験を踏まえて意見発表があり、西副講頭の閉会の挨拶、最後に、ご住職の題目三唱をもって、研修会は無事終了しました。

ご案内・お知らせ

＊春季彼岸会のご案内

本年の春季彼岸会は、三月十九日（日）から二十一日（火）にかけて、地

区別に五回に分けて奉修します。
講員の皆様には、所属地区の日時に合わせてのご参詣をお願いいたします。

◆彼岸会と地区懇談会の日程

19日（日）午前十時半　兵庫地区
　　午後一時　北摂地区
20日（月）午前十時半　大阪地区
21日（火）午前十時半　槻木地区
　　午後一時　豊能地区

＊お彼岸の塔婆はお早めに

春季彼岸会は、三月十九日（日）から二十一日（火）にかけて、地区別に五回に分けて奉修します。法要当日は混雑いたしますので、お塔婆はなるべく早い事前のお申込みをお願いいたします。

【訃　報】

【北摂地区】箕面市
実善院妙美大姉　二月十日寂
俗名藤野明美之霊　行年八十二歳
【北摂地区】吹田市
泰住院妙鶴信女　二月十二日寂
俗名中橋千鶴子之霊　行年九十三歳
この度、右の方々がお亡くなりになりました。
謹んで御冥福をお祈りいたします。

【弥生詠草】

今は亡き　母の石碑に　泣きすがる
　幼な児のごと　中国孤児は　〔和風〕

息子どち　皆合格の　知らせあり
　重き雲間に　青空いでて　〔農婦〕

【恵日俳壇】

冴返る村に三つの葬儀あり
廃校の石段長し菜種梅雨　〔森秀之〕

踏み分けて輝る残雪照り返し
幾度も登る峰々春の雪
踏み跡も無くて残雪ソロ登山　〔吉田裕〕

父母のおはさぬ家の夏座敷
青芒母亡き夜を深めけり
高階に灯の街見たり早星

【節分会住職挨拶】

お題目を唱えて難を耐え忍ぶ

本日は、節分会に当たりまして、ご参詣の皆様方の一切無障礙、厄払いの御祈念を、懇ろに申し上げました。

さて、この節分とか、あるいは厄ということは、あまり仏教とは直接的な関係は無いのであります。

しかし、法華経という教えは国境を越え、人種や民族、職業、性別など、いろいろな違いを超えて、それぞれの立場において信仰が持たれてきたのです。

これは、随方毘尼といって、あながちに法華経の教えに違わなければ、それぞれの地方や民族の習慣などを、そのまま取り入れて、仏教の行事の一環として受け入れて同化してきたのです。

ですから、正月の行事や、あるいは五節供の行事なども、みな妙法蓮華経のお祭りとしてお題目を唱えて報恩とねんまつに修行の機会にしたのです。

そういうわけで、節分の豆まきも、もともとは飛鳥時代とか奈良時代の古い頃から、追儺の儀式といって、年末に災厄を払う風習があったのですが、それが仏教の方にも取り入れられて、少しでも仏教寺院に近づくよう、また仏教の教えに縁するよう、弘める機会にしたようです。

いうまでもなく節分というのは、節を分けると書きますから、季節が大きく変わってくる時期で、明日は立春ですが、ちょうど冬から春に変わる境目になるのです。

奈良時代などは、旧暦でしたから、節分の時が大晦日になって、節分が明けると新年の立春ということになるのです。

一番日が短い時期ですから、どうしても自然界も活力が衰えて、陰気が漂っているような状態です。今年の冬も大変寒くて、気温が零度近くまで下がったりしていましたが、そういう自然界の厳しさが、生命力を損なって、うっかりすると風邪を引いたり、あるいはまた事故を起こしたりとか、何となく体調が優れなくなってしまうような時期に当たるのです。

そういう時に、それが昔は、目に見えないけれども、悪鬼が横行しているために現象となって現れているんだと考えられていたのです。

今でも、世の中にコロナが流行って、外から悪いウイルスが侵掠しているようですが、そういうことも含めて、煎り豆をまいて、それを追い払うという行事を、朝廷などにおいて行っていたようです。

大聖人の時代も、御書の中に、例えば、太田左衛門尉殿が五十七歳の時の大厄で、大聖人のもとに御供養を届けられて、そのことについて厄払いをお願いした御書なども残っています。

それを見ますと、大聖人は、これを法華経の信仰を深める機会と捉えて、

「厄の年災難を払はん秘法には法華経に過ぎず。……当年の大厄をば日蓮に任せ給へ。」（全集一〇一七頁）

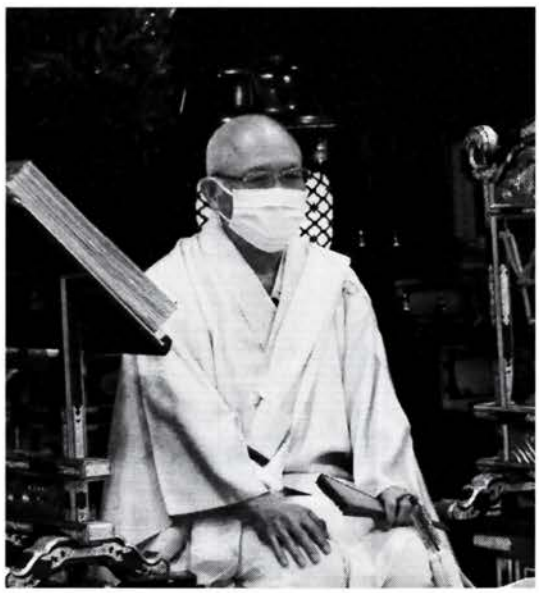
といわれているように、厄年で何かと思

い当たる辺もあって心配する太田殿を、法華経をしっかり持つならば、悠々泰然として健康問題などの災厄も打払えるということを、教えられているのです。

なるほど、考えて見れば、厄というのは、例えば事故を起こしたりとか、あるいは病気になったりとか、あるいはまた経済的にいろいろな面倒が起こったりとか、いろいろなことが考えられるのですが、そういう災難というのは、一つ一つ起こってくれば別に大した問題ではないのですが、そのタイミングが悪いと、一手に押し寄せてくるのです。

例えば病気をすると、必然的に経済的にも逼迫してきますから、それで経済的にいろいろ難しいことになってくる、そうするとますます焦って事故を起こしたり、そういうことが三つ四つ重なると、一家がバラバラになってしまうのです。一つひとつであれば、家族みんなで協力し合って解決していくこともできるのですが、悪いことは重なりがちで一遍に災厄を引き寄せてしまうと、大変なことになってしまって、回復不能の状態になってしまうのです。

世間でもよく犯罪者などのお決まりのコースを見ていますと、たいていお金が欲しくて犯罪を犯すのですが、その原因が何であるかというと、借金を払うためであるとか、あるいは遊ぶ金ほしさであるということですから、たいていの場合何か一つのことからはじまって、次々とやっかいなことを引き寄せてしまうということなのだと思います。


節分会に際し、挨拶されるご住職

そのことは結局、自分の心の弱さ、忍耐が足りないか、道からはずれて、余計傷を深くしてしまう、災いを大きくしてしまうということになるのだと思います。

もし我われのように法華経を信仰していれば、災難が起こったとしても、一心にお題目を唱えて、それを耐え忍ぶことによって、必ず、

「法華経を信ずる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。」（全集一二五三頁）

という御書の教えのように必ず好転するものです。それを信じるのがまた法華経の信仰でもあるのだと思います。

そういうことからいって、我われも厄年において、厄年のみならず、いつの時でも、一つの災いから二つ三つと引き寄せてしまうことにならないように、問題があれば一つ一つそれらを乗り越えていくことが肝要ではないかと思います。

本日は、節分会に当たりまして、寒さの厳しい中のご参詣ですが、この真冬の寒さに耐えてこそ自然界も新しい芽吹きが可能となり、来るべき春の開花に備えていることを見習って、我われもまたしっかりと信心を固めていきたいと思います。

本日は、大変ご苦労様でした。

三月の行事

一日（水）　午後二時　お経日

五日（日）　午前九時　講中勤行会・幹事会

十二日（日）　午後一時　お講・役員会

十三日（月）　午後一時　お講

※四月号の継命・恵日発送（3月末）は、
『大阪』地区が担当です。
五月号の継命・恵日発送（4月末）は、
『北摂』地区が担当です。

春季彼岸会地区別奉修のご案内

※本年も春季彼岸会を、左記のように地区別に奉修します。
法要には、なるべく地区奉修日に合わせてご参詣ください。

19日（日）　午前十時半　兵庫地区
　　午後一時　北摂地区
20日（月）　午後一時　大阪地区
21日（火）　午前十時半　槻木地区
同　　午後一時　豊能地区

源立寺

恵日

令和五年三月号　通巻三三八号
令和五年三月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道

発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内
TEL（〇七二）七五一―三一三五
E-Mail　kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料（含送料）　年間二〇〇〇円
〒振替　加入者名　恵日編集室会計
口座番号　01380-2-12649

恵日　三月号　通巻三三八号　令和五年三月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一―一〇　源立寺内　恵日編集室　購読料（含送料）年間二〇〇〇円